

越後路恋しや

大滝 貞一

<11>

毎月おびたしい歌集・歌書の寄贈を受ける。その中に『小川水明歌集』（平成九年五月・短歌新聞社刊）があって、次のような歌に心そそられた。初夏のころであった。

・雪氷る越（し）の固なる如月の夜のしつけや
 粟の啼く
 ・母しあれば遠くさかれる越後の方の空を見やらぬゆふべとてなし

・むらさきのけむりの如き山脈（やまなみ）の麓とそきく下保倉（しもほくら）村
 とくく三首目の歌は、私の出身地の名であったから一気に懐かしさがよみがえった。「友を訪ねて」という脚註が添えられていたから、その友こそ村松善行林を指すのであろうことは想像できたが、歌集にその説

明がない。

この『小川水明歌集』は和久利誓一編で水明の三女・茉莉子と結婚された人。「創作」にもとって、歌誌「武蔵野」を「山桜」と改称して、編集発行人となったりするが、晩年に治安維

「へんなか」

いろいろの文化を守る



フクロウ＝岩澤 久子（新潟市）

大正六年歌誌「光陰」を創刊したが第七号で休刊。作歌から遠ざかる。その後「創作」にもとって、歌誌「武蔵野」を「山桜」と改称して、編集発行人となったりするが、晩年に治安維

した歌誌を丹念に当たって彼の生涯作品一千首を収集されたという。苦心のほどがしのばれる。
 小川水明は明治二十五年十月、刈羽中里村（現小国町）生まれ。本名茂辰（しげとせ）。長岡中学から新潟師範学校に進むが中退。若山牧水の「創作」に加わり、のちに一時「潮音」にも作品を発表する。

持法違反などの罪で検察され、禁固一年六カ月の判決を受けて、執行猶予により出所。昭和十五年五月に四十七歳で死去した。
 歌集には『生雲水明歌集』『光陰』有明雲があるが、この『小川水明歌集』には、既刊歌集のほか、若干の追補作品を拾って、六百六首の作品を収録する。後半生にはこんな歌がある。

・徳師の白き蓮田に昼火事の煤の降りつつ夏の日高し
 ・石は石の影を落せり朝の陽のまだ裏からぬうすら紅さに
 ・圃（まど）かなる月夜の空にかかりあて我身は半の人にありき
 つねに、一種の反骨精神をもって、孤高の詩質とそぎ続け、純粹な自然美とそ

ここに生きる人間の寂寥感を歌っている。越後が生んだたくいまれなる叙情歌人と呼ぶのであろう。
 ところで、この歌人にかかわって後日思わぬ人との知遇を得ることになった。私がこの欄に村松善行林に触れた、ほんの少しの文章を書いたが、人を介して善行林の遺族についての問い合わせがあった。私の知り

得る限りを簡単に答えたのだが、ある日「へんなか」という雑誌と若干の文章コピーが届いた。
 差出人は「小国芸術村友の会」の高橋実という人。「へんなか」は「歌人小川水明特集」で、この八月二十四日に小国町で開催された「小川水明講演会」の記録が収録されていた。講師は、全歌集編者の和久利誓

一氏と柏崎の松田秀明氏。「小川水明歌集」の懇切な解説や年譜によって、郷土の歌人の人と作品が明確になっていったころへ、さらにも詳細な資料が届けられて驚喜したのである。
 同誌のコピーは、水明が二十四歳の時に越後の歌人なかに呼びかけて創刊した「光陰」創刊号。そこに、村松密猟船（善行林のペンネームの一つ）の「北方地主嗣子哀歌」十八首が載っていた。みずからの境遇自

ひ色遣といひ深くして透つた作品だと思はれます。その光と鋭さは歌壇近時の一異彩とするに憚らぬと思はれます」と書く。これで「友を訪ねて」の刊にも判然とした。高橋氏は私の便りをもとに、善行林旧居まで水明資料を求めて訪ねていったのであった。
 さてここで、ぜひ書いておきたいのは「へんなか」の題名由来。「へんなか」は「火の中」が訛（なま）った、いろいろの意味する方言とか。煤（すす）けた自在鉤（かぎ）がつるされた「へんわた」（短端）は、雷国の人々のコミュニケーションの場であった。「ひろがってあたつてくんせえ」と、文化の再発掘によって、地域振興を呼びかける。この地域にも、猥物的に周辺文化をよみがえらせそれを守っていくとする人々の努力がある。県内全体に「へんなか」精神の輪が広がってほしいものである。（歌 人）
 毎月第一、第四水曜日掲載

文化